

「教え子を再び戦場に送らない」(戦後の日教組のスローガン)

◆世界で戦禍が絶えず、徴兵制度の国では期間延長や強化、また徴兵制復活の国も出ています。現在の日本では徴兵制度はないが、自衛隊員が充足されずひそかに徴兵制度が検討されているという危惧もあります。◆明治時代、「日本で最初の兵役拒否者」に福島県会津出身の矢部喜好きよしがいますが、敬虔なクリスチャンで、「人権」を体現した先駆者のひとりとして高く評価されています。

日本最初の良心的兵役拒否者 矢部喜好きよ(会津・喜多方出身)

元福島大学学長・前県九条の会代表 吉原泰助

キリスト者として日露戦争に断乎反対

「戦争は神の福音に叛く大罪」

大日本帝国は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけ世紀転換期をはさんで、日清・日露の二つの戦争に突入する。この戦争への加担を敢然と拒否したキリスト者がある。一八八四年(明治十七年)、耶麻郡蓬萊村「のち木幡村」舟引(現喜多方市山都町蓬萊舟引)に生まれた矢部喜好きよ(写真)が、その人である。



矢部喜好き

彼の生家は、父親が小学校長を務めた旧家であつたが、その後事業に失敗し傾くにいたる。そのころ、会津中学在学中の喜好きは、「末世の福音教会」の伝道師の説教に触発されてキリスト教に入信、神の教えに忠実な僕として生きる道を選ぶのである。時あたかも日露戦争前夜、国民の多くは、戦争熱に浮かされていた。彼は、信者仲間と「戦争は神の福音に叛く大罪である」と大書した旗を掲げ、「断乎戦争に反対する」というビラを配りながら、群衆が投げつける瓦礫や罵声をもとめせず、高張提灯をかざして連夜会津若松の町を練り歩いたという。

たまたま、東山温泉に逗留していた時の文部大臣が、これを聞きつけ大騒ぎとなる。父親にも

勘当され、学校でも持て余された矢部は、卒業直前、雪の会津西街道(下野街道)を歩いて山越えで脱郷し上京、東京では「伝道学校」に入る。そして、ほどなく故郷に近い喜多方町に戻って「講義所」を開き、伝道に従事した。ちなみに、父母・祖母等、彼の肉親たちは、日ならずして彼の信仰に理解を示し、キリスト教徒となつて、以後、喜好きを支えた。

「汝殺すなかれ」と召集令状を拒否

(日露の)開戦二年目一九〇五年(明治三八年)の正月、最大の激戦地・旅順陥落に世間が酔っていたころ、ついに彼にも召集令状が届く。入営前日、彼は仙台の連隊長宅を訪れ、「汝殺すなかれ」という十戒の言葉を引き、「神の絶対的命令に背いて、銃を執り敵兵を殺すことは出来ない」と、悪びれずに信条を吐露した。あわせて、軍紀に照らしての処断を請うたという。困惑した軍は、裁断を軍法・軍律ではなく、一般の司法に委ねた。すなわち、「召集不応の罪」で若松区裁判所の公判に付されることになつたのである。

「剣をとる者は剣でほろぶべし。」

戦争は戦争で終わらせることはできない

矢部は法廷で昂然と頭をあげ、「こう主張したいわく「神は、罪のない人間を殺してはならないと教えています。戦争は人を殺します。人を殺

(裏ページへ)

(表ページより)

す戦争に参加することはできません。聖書には 剣をとるものは剣にてほろびべしと書いてあります。戦争は戦争によって終わらせることはできません」と。『会津日日新聞』を筆頭に、地元紙・地方紙は、一斉に彼を「不忠」な「非国民」としてたたいた。たとえば、鈴木範久氏に拠ると、『会津日日新聞』は書く、「被告は兎に角軍隊生活は神の教えに反くものなれば例令白刃の下に斃るゝも入営する能わすなと、上唇と下唇の打つゝかり放題出鱈目を吐く」といった調子で。判決は「軽禁固二月」であった。退廷する若者の背には、悪罵の礫があびせられた。引つ込みの付かない軍は、矢部が刑期を終え若松監獄から釈放された直後、仙台の第二師団長みずから彼を会津に訪ねている。本人も親も翻意する気配はなかった。

### 禁固二カ月 看護卒（衛生兵）として応召

こうして、彼の信条の揺るぎないことを知った軍当局は、折れて、銃をとらねばよいだろうと、看護卒勤務を約束し、矢部も受け入れられる。除隊後、彼はアメリカに渡つて、十年近く滞在、いくつかの大学で学んでいる。

### 滋賀県大津市を中心に布教活動

矢部は帰国後、琵琶湖湖畔の膳所（大津市）を中心に布教活動にたずさわる。満州事変勃発の直後、彼は雑誌に「極東平和のため」という掌編を寄せている。

「東亜の空に不安の暗雲が突如として現はれ……拡大せられつつあるは……胸を痛むる重大事である……永遠の平和を獲得するための戦争などと

いう事は痴人の夢、見よ満州に於ける明治二十七八年、三十七八年の両戦役はいづれも恒久的な平和を極東に与へるのだと約束したではないか？ 憎悪・残忍・殺伐の種子をまいて平和・喜楽・慈愛の実を得るは木によって魚をもとむるよりも六かしい。……干戈によって国際間の正邪・曲直を決せんとする



は断じて不可、神の子である人のとるべき方法ではない。へ凡て剣をとる者は剣にて亡ぶべし（マタイ廿六の五十二）と。

翌々年の一九三三年「昭和八年」、彼は故郷に帰り、「山三郷農民福音学校」（山三郷Ⅱ西会津・山都・高郷）を開設する。十五年戦争のさなか、天皇制ファシズムの暗い谷間で、晩年の矢部は、故郷の福音学校の講壇の上から、往時を振り返つて、「国賊と罵られ、命をとられても、キリスト教徒としての良心は戦争反対を叫ばなければならなかった」と、変わらぬ反戦の想いを、涙を流しながら熱く語つたという。

この日本最初の良心的兵役拒否者、信仰厚き反戦の徒は、一九三五年「昭和十年」夏、彼の伝道の一拠点大津に近い京都の病院で神に召された。いまわの際で彼の頭をよぎつたのは、「幸福なる哉、平和ならしむる者、其人は神の子と称へられん」というへ山上の垂訓の一節であつたかも知れない。

以上は福島県九条の会発行のブックレット1、吉原泰助著『福島県が生んだ平和と人権の先駆者たち』より。

◆この「ブックレット1」には、①自由民権の岡野知荘・河野広中・井上平吉、この②日本最初の良心的兵役拒否者の矢部喜好（やべ・きよし）、③朝河貫一、④鈴木安蔵が記載されています。◆執筆の吉原泰助先生（元福島大学学長）は、東京大学時代から小和田恆氏（皇后雅子さまの父）との親交が深く、「福島県九条の会」代表として平和活動に尽力されましたが、2022年1月21日88歳でご逝去。遺族が今年8月に経済学の西洋専門書などを福島大学に寄贈し「吉原泰助文庫」が新設されました。

◆9月8日付『朝日新聞』沢村互記者の「日曜に想う」でも、「矢部喜好」が一言紹介されています。

○私たちの父母や祖父母の世代は過酷な戦争を体験しました。私たちは戦争に巻き込まれず、出征の体験もなかった幸運な世代です。○でも私たちの子どもや孫たちの将来はどうなるでしょう。外交軽視、軍事優先で戦争に突入したり、“徴兵制の復活”なども心配でなりません。